

※点字毎日記事より、一部抜粋したものです

障害者が援助を受けながら共同生活する視覚障害者専用のグループホーム「ease イーズ」。近くには就労継続支援 B 型事業所「rubato ルバト」も設置して、職住近接を実現した。

新京成線電鉄二和向台駅から 10 分ほど歩くと、角に青い壁のイーズがあった。施設のように大きな看板はなく、スロープはあるが外観は一般の民家と変わりがない。近くにコンビニストアやスーパー、郵便局があり、生活に便利な立地だ。

出迎えてくれたのは株式会社 oneseif(ワンセルフ)の代表、飯田大介さん。飯田さんは 20 年にわたり、知的・精神障害者のグループホームの運営に携わった。旧知の仲である船橋市障害者協会の会長で森哲也さんから「視覚障害者向けのグループホームを作りたい」と相談を受け、ワンセルフを立ち上げた。

森さんが建築業を営んでいることもあり、イーズは段差のない造りや手を伸ばせば壁に触れられるような廊下の幅、窓と階段、手すりなどの濃紺を際立たせた配色など視覚障害者が住みやすい工夫を凝らした。

約 6 畳の個室には洗濯物や布団が干せるベランダをもうけており、「近所の人が雨が降ってくると教えてくれたり、濡れないように洗濯物を取りこんでくれたこともあったようです」と飯田さん。グループホームが地域の延長線上にあることで、社会の一員として交流できる側面もあるようだ。

利用者が台所で昼食などを調理することもでき、このときは職員が見守り、場合によっては手助けする。「必要以上にやらないようにしています。グループホームは単に生活をサポートするのではなく、あくまで生活を豊かにするツールととらえてほしい」と飯田さんは話す。

イーズの近くに開所した視覚障害者向けの B 型事業所をルバト。地域の視覚障害者のほか、イーズで暮らす人の中にも利用者がある。梱包の軽作業を請け負い、工賃は県内平均を超えている。

プラスチック製の補助具を使い、大きなトートバッグを四角く折りたたんでいた全盲の男性がイーズで暮らす。「皆さんの指導のおかげで育てられています」とおどけながらも、アイロンのように手でしっかりとしわをのばす。

これとチラシを別の透明な袋に入れ、テープでとじていた弱視の男性は、「視覚障害者は他の障害と異なり、住宅と仕事の確保が難しく、行き場がなくなってしまう。こうした施設はありがたい」と話した。

「あそこに行くんでしょう？」と地域の人から声をかけられ、ルバトまで手引きしてもらった利用者もいるという。ここでも地域とのつながりが生まれつつあるようだ。飯田さんは「情報が入り、教えてもらう場として認識してもらいたい」と地域で暮らす視覚障害者の拠点を狙っている」